泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28173

b. 中田家と鏡花の祖父・中田猪之助（三代）について

平成 17 年（2005）10 月、泉鏡花研究において重要な資料を含む、金沢の能楽史上たいへん貴重な文献が 1 冊にまとめられ、刊行された。『大鼓役者の家と芸—金沢・飯島家十代の歴史—』（長山直治・西村聡編　飯嶋調寿会発行）は、金沢で約 280 年にわたって能の大鼓方を務める飯嶋六之佐家所蔵の資料集成である。享保年間から家芸を守り続ける飯嶋家は、加賀藩前田家の保護を受けた町役者だったこともあり、鏡花の母方の実家であり、同じく前田家の御手役者として大鼓方を務めた中田家との交流が深く、飯嶋家には現在も鏡花の祖父である三代中田猪之助との往復書簡等が残されている。幕藩体制の崩壊により多くの御手役者・町役者が能を離れざるを得なかった中で、金沢でも唯一変わらずその家芸を伝えてきた飯嶋家ならではの貴重な文献であり、既に同書の編著者である長山氏によって翻刻・論考がされているが、現在絶版でもあるので、ここで鏡花との関わりから改めて触れておきたい。

鏡花の母鈴は加賀藩御抱能楽師で葛野流大鼓方の中田万三郎の娘として知られている。中田家は中田千五左衛門を初代とする大鼓師として代々江戸詰の御手役者を世襲した家であり、家芸二代から猪之助を名乗っていたことが確認されている。鏡花の曾祖父にあたる中田猪之助（二代）は、初代千五左衛門の死により寛政 4 年（1792）に家芸を継承し、以後 60 年間にわたって藩の御用を勤めた。文化 8 年（1811）2 月には、焼失した金沢城二の丸の造営成就ならびに十二代前田斉広の家督相続・入国祝賀の儀式能が同二の丸で行われるに際し江戸から随従、後に藩政時代における金沢藩最大の盛事〈文化の大規式能〉として知られたこの演能に大鼓方として出演している。

鏡花の祖父である中田万三郎が父猪之助（二代）から家芸を引き継いだのは天保 12 年（1841）であり、江戸在住時は宝生友于（十六世宗家・号紫雪）が弘化 5 年（1848）に江戸神田筋違橋門外で行った一世一代の勧進能に出演（江戸時代最後の勧進能）、また安政 3 年（1856）には〈師匠家より御申聞ニ付〉万三郎から猪之助（三代）に改名している。

三代猪之助が江戸を離れ、妻と長男夫婦、そして娘の鈴を伴い金沢に移住した正確な時期は不明であるが、明治元年（1868）11 月 23 日には金沢の金谷御殿（前田家の別邸）における十三代前田斉泰・十四代慶寧父子の演能に長男惣之助とともに出演している。9 月 8 日の明治改元前の同年（慶応 4 年）4 月には、江戸居住の御手役者に対し、藩から扶持・給金の続行を条件に御国居住の命が下っており、猪之助が一家を引き連れ帰藩したのもこの命を受けてであろう。鏡花自身、母あるいは祖父母からこの話を聞かされていたのか、〈能楽もの〉の一つに数えられる小説「笈摺草紙」に〈慶応元年、上野の戦争にさきだつて、江戸は修羅の巷となる由、予め騒いだので、紫の一家は、両親と、兄と嫂、嫂は江戸の生でない上総のもので、嬰児を持つて居た。此の乳呑児と、犬張子と合乗で駕籠一挺。紫十

六と云ふ時、厚裏の雪蹈を赤い切で結へた旅装束のまま横に乗つた一挺、都合二挺。両親は老人で二人一ならびに馬に乗つた〉と、母鈴と中田家をモデルとする能楽師一家の帰藩の様子を描いている。また、鏡花の死後、多くの遺品が寄贈された慶應義塾図書館には、鈴の姉妹から鈴宛に送られたと思われる書簡が残されており、両親とともに金沢に下った年若い鈴に老いた父母の今後を託す切なる思いが綴られている。

移住後の中田猪之助・惣之助父子の出演記録としては、上記の金谷御殿の演能の他、明治2年に巽御殿（明14に成巽閣と命名）で真龍院（前田斉広継室）の長寿を祝って舞囃子などが催され、後に〈加賀藩の挽歌〉と称された真龍院八十の賀の祝宴や、同年の卯辰山観音院の能などが確認されている。明治 3 年、武家社会を思わせる名を避ける時代の趨勢により中田猪之助は豊喜、惣之助は孫惣と改名、明治 4 年には前田斉泰・慶寧が東京へ移住し、そして明治 5 年、猪之助ら御手役者への扶持が差し止められた。この間に猪之助改め豊喜の娘鈴は、元加賀藩御細工者・和泉屋庄助の息子で加賀象嵌の彫金師・泉清次に嫁し、鏡花以前に一子をもうけるも死産したとされている。

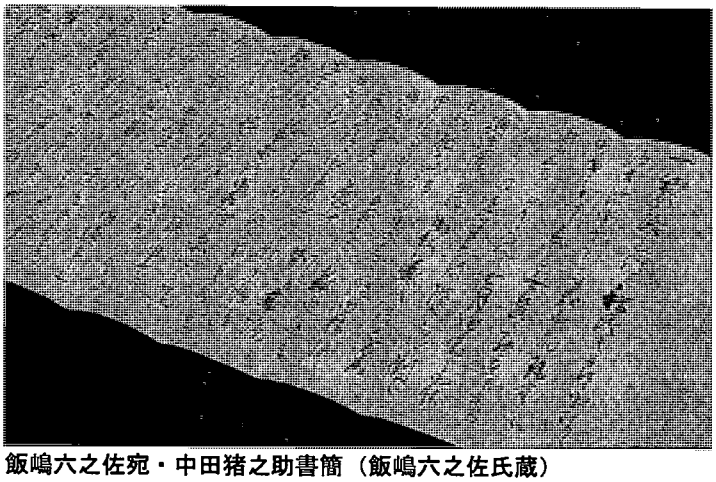
その後、鈴が後の鏡花を懐妊中の明治 6 年 6 月、当時高岡へ出稼ぎ中だった夫清次に宛てた鈴の書簡からは、鈴の両親すなわち中田豊喜夫妻が金沢下新町の泉家に同居している様子が窺える。おそらく扶持差し止めが影響してのことであろう。本来ならば猪之助を継ぐはずであった惣之助改め孫惣は妻と二人の娘を残して明治10年に死去、豊喜も金沢城の二の丸が再び焼失した明治14年にこの世を去っている。二人の墓は宝生紫雪が眠る能楽師ゆかりの全性寺にあり、「新地中」と刻まれたその墓石から、帰藩後の中田父子が舞台に立つ傍ら生活のために当時「東新地」と呼ばれた現在のひがし茶屋街の芸妓に鼓を教授していたであろうことが推測されている。

こうして大鼓方としての中田家は絶えたが、前掲書で翻刻・公開された資料は、前述の通りその後も家芸を継承した飯嶋家が自家の歴史とともに保存してきたものであり、江戸から明治初期にかけての波乱の時代を生きた能楽師の姿を公私にわたって伝えている。特に中田家関連の書簡に限っていえば、安政 3 年（1856）6 月の飯嶋六之佐（四代）宛・中田猪之助（三代）書簡から慶応 3 年（1867）8 月推定の飯嶋六之佐宛・中田猪之助書簡まで43点が確認されており、内容的には両者の師匠である葛野流大鼓の家元・葛野九郎兵衛からの相伝に関する実務的なやりとりが主となっている。これらの資料から、在藩の葛野流大鼓方である飯嶋六之佐が免状等を受ける際には、江戸在住で家元にも近く、六之佐よりも 8 歳年上の兄弟子であった中田猪之助がその取次を行い、逆に猪之助が藩に願い出等がある際には、在藩の六之佐が取次を行うといった関係にあったことが判明したが、江戸－金沢と離れてはいるものの同じ葛野流の兄弟弟子として親しい間柄にあった両者は折に触れ自身や家族の近況なども報告し合っており、鏡花研究の側からすればこれによって中田家の金沢移住以前、つまりこれまで不明であった娘時代の鏡花の母鈴の事跡をたどる上でも貴重な情報を得ることができた。詳細については前掲書を参照されたいが、大略を記せば当時、湯島天神中坂下の上手代町にあった中田家は安政 2 年 10 月に起きた大地震、及

び翌安政 3 年 8 月の大暴風雨によって被害を受け、同時期の猪之助名継承を喜ぶ暇もない窮状にあり、長男の惣之助が無事御手役者として扶持を受ける身とならなければ困窮は必至という状況にあった。また文久 2 年には麻疹が流行し、猪之助とその妻、惣之助らが罹患したと記されている。この間、一家は前記災害による自宅損壊のためか近隣に転居していたことが窺えるが、慶応 2 年 2 月には本郷・湯島一帯を焼いた火事でその住居も類焼、書物・鼓筒・謡本を持ち出したのみで〈箸壱本不持身〉となったと書簡には記されており、一家のうち猪之助・惣之助は猪之助の三男で宝生流地謡の松本弥八郎の養子となった松本金太郎（次項参照）方に、妻と娘は小川町の親類に身を寄せたが、数日で根岸の仮宅に転居、同年 8 月には下谷坂本町二丁目札ノ辻横町に住まいしていたことがわかっている。鏡花は自身の年譜の中で母鈴を下谷生まれとしており、これは通説となっているが、猪之助書簡が示すように下谷はあくまでも度重なる災禍により転居が続いた中田家の帰藩前の最後の住所と思われ、これを鏡花は母の生誕地と思い込んだのではないかと長山氏は指摘している。

現在判明している鏡花生誕時における中田家の面々は母鈴とその父母で泉家に同居していた中田豊喜夫妻、豊喜の長男孫惣とその妻ちよ・長女ふみ・次女かね、前述の松本金太郎一家、そして中田家の帰藩時には既に嫁していたため江戸に残ったと思われる鈴の姉妹中田きんのみであり、その他の係累については不明である。中田家をモデルとする人々が登場する鏡花の〈能楽もの〉にも上記以外の人物が登場することはないので、鏡花自身もこれ以上のことは知り得ていなかったと思われる。なお、中田家のその後と所持していた名筒の行方については、この飯嶋家文書にいち早く着目していた山森青硯氏によって示唆されているように、伯父松本金太郎の死に際して筆を執った鏡花の「新通夜物語」に描かれているが、詳細については本誌掲載の拙稿「『新通夜物語』覚書」を参照されたい。

（穴倉玉日）



飯嶋六之佐宛・中田猪之助書簡（飯嶋六之佐氏蔵）